理事からのメッセージ

TTC創立40年を迎えて ～標準化の功績とこれからへの期待～

理事
浅井　光太郎（三菱電機株式会社　研究開発戦略部　シニアフェロー）

TTC が創立 40 年を迎えることを心よりお慶び申し上げます。この間、TTC の運営にご尽力された皆様、支えてこられた事務局の皆様、ICT に関する議論と標準化活動およびその啓発にご貢献された皆様、TTC 会員の皆様のご努力に厚く御礼申し上げます。

40 年といえば、一技術者には職業のライフタイムに近い時間です。この 40 年は通信自由化と TTC 設立に始まる年月であり、一般ユーザにとっては、端末が固定電話からファクシミリ、パソコン、スマートフォン、ウェアラブルへと多様化し、電話音声からオーディオ、写真、ビデオ、各種データを活用できるように大きく変化した年月でした。企業ユーザにとっても、高速広帯域なデジタル通信網は必要不可欠なインフラとなっています。TTC は標準の策定を通じて、デジタル電話網、ADSL、光アクセス網、モバイル通信網の構築と進化、普及に極めて大きな貢献をしてきました。直近 10 年にはコロナ禍がありました。当時、リモートワークなどで底上げされたトラフィックは、その後も減少せず、以前と同程度の割合で増大を続けています。各種のサービスを支えるデジタル通信網は紛れもなく社会インフラの一部と認知されるようになりました。

筆者が勤務する三菱電機も上記歴史の一部を担いました。筆者自身は映像符号化の分野ですが、同僚が取り組んでいた光アクセスの分野では、TTC また ITU 標準化および日本における FTTH の普及に少なからず貢献したと自負しています。会社としても大きな事業機会をいただきました。アクセス網にスライシング技術を導入するためのアーキテクチャの標準化にも貢献しました。現在も光アクセス、網管理、モバイル、IoT、AI、マルチメディアなどの専門委員会で活動しています。

標準化の目的は技術の進歩を協調領域として共有し、産業の振興を支え、これらの進展が社会に役立つことでしょう。TTC が担う ICT の標準化は、既に通信インフラの高度化から上位レイヤの ICT 活用に拡大しています。標準化への関心が上位レイヤに移行する傾向も顕著です。アプリケーションやサービスの観点から、通信インフラの備えるべき機能と性能、上位に提供する API の設計が重要な課題でしょう。

これから TTC が取り組む標準化はどうなるかについて考えてみます。人と人をつなぐだけの時代はとうに終わり、IoT や M2M が本格化する時代を迎え、人や組織を代行する AI と AI、異なる分野の産業と産業とをつなぐことが現実の課題となりつつあります。AI は通信網の末端に接続されるだけでなく、通信網の運用を管理し、通信インフラに埋め込まれ、時には複数の地点において分散協調する存在になるでしょう。多様な産業がデータを共有ないし連携させてエコシステムを形成する社会インフラが求められます。従来とは異なるトラフィックへの対応、産業のニーズに沿った多様なデータを個別の要求条件に従って伝えることへの対応が必要になるでしょう。このために多くの新たな国際標準を策定し、協調領域を構築しなければなりません。何より、通信機器ベンダにとどまらず、広い範囲の通信ユーザである産業の担い手を巻き込むことが必要です。TTC のミッションは極めて重要と考えます。

本稿の最初に、40 年は一技術者の職業ライフタイムに近いと書きました。TTC に 40 年のライフタイムはなく、次の 40 年が続きます。標準化に携わる技術者として長年従事しておられる方が多いことは事実ですが、三菱電機では新たな世代も標準化に参加しています。今後とも TTC という場が標準化を通じた議論や協働、相互研鑽の場であり、産業の振興と社会課題の解決に貢献すること、成果がグローバルに展開されることを期待しています。同時に一理事として、TTC が活動に参加する方々に成長と喜びの機会を提供する場であるように、魅力的な場であるように、力を尽くして参りたいと思います。